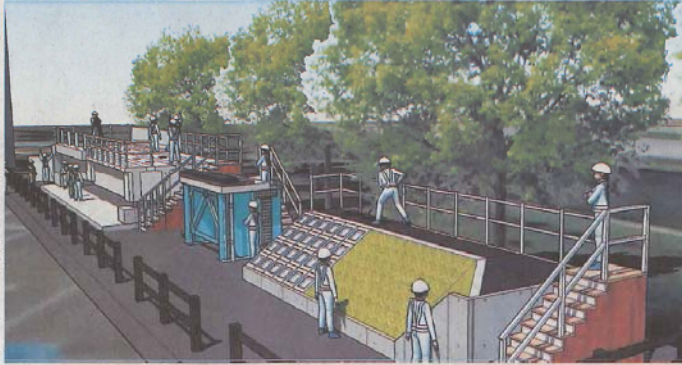


# トンネルや橋、インフラ実物大

# 岐阜大に土木ミュージアム



岐阜大インフラミュージアムの完成イメージ図

## 維持管理の人材養成

岐阜大（岐阜市柳戸）は、トンネルや橋、盛り土といった土木構造物の建設過程が学べる実物大の模型を学内に配置する「インフラミュージアム」の整備に着手した。高度経済成長期に築かれたインフラの老朽化が課題となる中、構造物がどのように造られたかを理解した上で点検や修繕に反映できる維持管理技術者の養成に役立てる狙い。新年度中の完成を目指す。（小森直人）

## 新年度中の完成目指す

同大工学部付属インフラマネジメント技術研究センターによると、教材用に古い橋などを権内に移設した大学はあるが、複数の土木構造物を学内に新設した大学は例がないという。工事現場にタイミング良く出向くのが困難な中、いつでも安全に見学できる場を設け、岐阜大が養成を続ける「社会基盤メンテナンスエキスパート」や工学や力学を学ぶ学生の教育に活用する。

ミュージアムは内閣府の戦略的イノベーション創造プログラムの助成や企業の協力も得て、国際交流会館隣の新堀川沿いの屋外に整備。幅約50m、奥行き約10mの敷地に長さ15mの実物

大コンクリート橋をはじめ、橋の鋼桁やトンネルの断面、高速道路の土台などに用いる盛り土の四つの構造物を新造する。通常はコンクリートに隠れた部分を一部あらわにするなど見せ方も工夫する。

計画では、トンネルは輪切りにして横倒しにした展示。矢板を使って土留めや水の締切りを行う「矢板工法」とトンネル周囲の地山が自らを支える機能を利用した「NATM工法」を半分ずつ再現する。橋は橋桁を裏側からも観察でき、力を逃がす設計を学べるようにする。

沢田和秀センター長（49）は「実物をじっくり見学することで、座学で学んできた設計の思想を深く理解でき、維持管理技術の向上につながる」と話している。